

自己点眼手技向上への取り組み

～白内障患者への点眼指導を統一してみても～

3階西病棟 ○宮崎 麻衣子 益田 智美 結城 美里 高野 美香

[はじめに]

当院では3院の眼科医院から年間約160件の眼科手術が実施されており、その約140件が白内障の手術となっている。予め院外薬局から点眼の説明を受けて入院してくるにも関わらず、術前点眼の実際をみると清潔で確実な点眼手技は行えていないことが多く、これまで手術後の点眼指導もスタッフ個人の指導力に差があり繁雑な業務の中で行ってきた現状があり退院後の再診の際に不安を訴える患者や点眼が行えていなかったと医師から報告を受けることも多々あった。そのため、入院時に自己点眼能力をスコアリングし、自己点眼が可能か、見守りが必要かもしくは家族に実施してもらうかの判断を行うとともに、術後翌日に行う点眼指導の方法を統一したことで確実な手技の向上が図れたことが分かったためここに報告する。

[目的] スタッフ全員が統一した方法で点眼指導を行えば、患者の自己点眼手技が向上するのかを明らかにする

[方法]対象と期間：2018年8月～12月までに当病棟に入院した白内障患者 計91名

- ①独自の自己点眼アセスメントシートを作成し入院後と退院前に評価を行う
- ②新たに退院指導のパンフレットを3院で統合したものを作成
- ③術後翌日に1名の看護師が点眼指導を実施

[結果] 2018年8月～12月までの白内障手術患者91名に対し、点眼アセスメントシートを用いて入院時に評価を実施。術後翌日に新たに作成した退院指導表を用いてげんこつ法での点眼指導を看護師1名が実施した。退院前に再度自己点眼手技の評価を実施したところ、入院時は見守り点眼（B評価）とされた患者でも、退院前の評価では自己点眼可（A評価）へ手技が向上できている患者が少なからず増えた。

[考察] 3院統一したパンフレットを作成し、げんこつ法での点眼法を事前にスタッフへ説明したことで患者への指導方法の標準化が図れた。自己点眼アセスメントシートの集計結果から点眼指導前後を比較すると①～⑥すべての項目において判定結果が改善していることがわかる。入院患者は比較的高齢であるためげんこつ法で指導したことにより点眼容器の安定性が図れ確実な点眼が可能であった。武田氏¹⁾は「感染および消炎のため術後が正確かつ確実に行われることは重要」と述べている。術後は感染等合併症を予防するためにも清潔で確実な点眼は必要であり、退院後も継続して行う必要がある。しかし、これまで眼科入院は3泊4日と入院期間が短いこともあり確実な点眼手技を獲得できず退院となることや、患者は比較的高齢で認知機能の低下や家族のサポートが得られないこともあるため退院後継続した点眼を行えていない現状がある。そのため、看護師は入院中に患者の点眼手技のアセスメントを行い清潔で確実な点眼手技の獲得を目指すために点眼指導を行うことが大切であると考えた。